

1 研究主題

「音楽のよさを追求する子供の育成」

2 研究主題について

(1) 研究総論との関連

本校研究主題「ともに学び、学び抜く子供」とは、総論で述べられているとおり「困難な課題に対してあきらめずに向かい合い、試行錯誤しながら取り組んだり、協働して解決策を考えたりしてやり遂げようとする姿」である。その姿を実現するために本校研究副題に書かれている「非認知能力に注目した授業」を目指していく。

本校音楽科では、令和元年度より、「学びをつなぐ子供—教科等の本質に迫る授業を通して—」のもと、「音楽のよさを実感し、自ら音楽を味わう子供を育てる授業」を研究主題とし、音楽的な見方・考え方を働かせて、音楽科の本質に迫る授業をするための研究を進めてきた。研究を行う上で、いくつかの成果と課題が見られた。主な成果は、音楽の見方・考え方を働かせて、聴き取ったこと（以下「知覚」とする）と感じ取ったこと（以下「感受」とする）の関わりに気付くことができた点である。一方課題としては、知覚と感受が関わり合っていることは知識として理解できたが、関連していることを生かしてよりよい表現につなげたり、様々な鑑賞時に生かしたりすることが難しかった点である。

本校研究主題や昨年度までの研究の課題を踏まえ、音楽科では「音楽のよさを追求する子供の育成」という研究主題を設定した。「音楽のよさを追求する」姿とは、よりよい表現を求めたり、曲全体を味わって聴いたりする姿である。その姿を目指すために、授業で扱う楽曲を聴いて感じたことを、楽曲の中の要素の働きをよりどころとして捉えるという知覚と感受の関連を実感する学習を大切にしていきたい。なぜならば、知覚と感受の関連を実感することで、「聴いてワクワクする感じがしたから、速度を速くしてみたい。」などのような「このように表現したい。」という思いや意図をもったり、「スキップしたくなるように聴こえたのは、タッカのリズムがたくさん使われているからだ。」などのような音楽の楽しさやよさなどを見だし、曲全体を味わって聴いたりするというつながりやすくなる考えるからである。その知覚・感受の関連の実感を積み重ねていくことで知識が増えていき、知識という引き出しが増えれば増えるほど、表現や鑑賞の学習をする上で、選択肢の幅が広がり、音楽のよさを追求しやすくなるのではないかと考えた。

音楽科では、音楽に対して心が動き、表現したり鑑賞したりしたいと思うことを「意欲」、音楽的な見方・考え方を働かせながら、よりよい表現を求めたり、曲全体を味わって聴いたりすることを「粘り強さ」と考えた。

知覚・感受の関連を実感する機会をつくったり、「意欲」や「粘り強さ」に働きかけたりすることで、本校音楽科の研究主題「音楽のよさを追求する子供の育成」が図られるのではないかと考えた。

(2) 音楽科で考える「ともに学び、学び抜く子供」の姿について

協働して音楽を学習するよさを感じ、音楽的な見方・考え方を働かせながら、音楽のよさを追求する子供

本校音楽科が考える「ともに学ぶ」とは、「協働して音楽を学習するよさを感じる事」である。「協働して音楽の学習をするよさ」とは、音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図りながら、友達と音楽表現をしたり、音楽を味わって聴いたりする楽しさなどをいう。音楽科の学習は、一人で音楽活動を行うこともあれば、集団で行うこともある。一人で音楽活動をするのも楽しいが、友達と一緒に音楽活動することも楽しいといった、音楽科の学びの特質¹を反映していると考えられる。また、感じ方や考え方の多様性を尊重する態度や互いのよさを生かして目標に向かっていくことも協働することのよさであるといえるだろう。

本校音楽科が考える「学び抜く子供」とは「音楽的な見方・考え方を働かせながら、音楽のよさを追求する子供」である。「音楽のよさを追求する」とは、「よりよい表現を求めたり、曲全体を味わって聴いたりすること」である。「よりよい表現」を求めていくためには、子供が思いや意図をもち、その思いや意図を実現するために表現方法を試行錯誤していくことが必要だと考える。「曲全体を味わって聴く」ためには、自分にとっての曲や演奏のよさなどを見いだせるようにすることが必要だと考える。

そのためには、音楽の学習に対して粘り強く向き合うことが必要であり、粘り強く向き合うためのもととなるのが「意欲」だと考える。音楽科で考える「意欲」とは、「こんな感じの音楽にしてみたい。」という思いをもったり、「不思議な感じがするのはなぜだろう。」という疑問をもったりするなど、音楽に対して心が動き、表現したり鑑賞したりしたいと思うことである。その「意欲」がもととなって、どのように表現するか考えたり、不思議な感じがするのはなぜか音楽を聴いて考えたりするという「粘り強く」学習と向き合うことにつながってくる。「粘り強く」学習と向き合うためには、音楽的な見方・考え方を働かせることが必要であろう。本校の前研究で、音楽的な見方・考え方を働かせることにより、知覚と感受の関連を実感できたという成果があるため、今回の研究でも踏襲していく。音楽的な見方・考え方を働かせて、学習に向き合うことができるように、本研究においても手立てを講じていく。

1年次の成果として、他者との協働を通して、音楽活動に楽しく取り組んだり、他者の考えを聞いて納得したりする姿が見られた。また、課題設定を工夫したことにより、子供たちから「やってみよう」という声を聞くことができ、意欲をもたせることにつながった。一方課題として、試行錯誤しながら音楽のよさを追求していく姿を見るのが難しかった、2年次は、そこに働きかけ、粘り強さに着目した研究を進めていく。

4 研究内容

(1) 音楽科における「意欲」「粘り強さ」に働きかける授業について

音楽科では、「意欲」と「粘り強さ」に働きかけるために、主に4つの手立てを講じて、研究を進めていく。

① 題材構成・課題設定の工夫

子供が意欲をもち、粘り強く学習に向かうために、題材構成や課題設定の工夫をしていく。子供の意欲に働きかけ、試行錯誤しながらよりよい音楽を求めていけるようにするには、学習に没頭できる場を与えていく必要があるであろう。そのためには、課題設定の工夫が大切だと考える。子供の思いに合った学習課題を設定することで、子供たちが課題に意欲的に取り組めるようにしていきたい。

1年次に行った2学年の音楽づくりの実践では、「お祭りの音楽」を題材とした。それぞれの子

¹ 友達と思いなどを共有するためのコミュニケーションが、言葉だけではなく、音や音楽を介して行われるということである。

供がお祭りの音楽をつくったが、つくったことで満足してしまい、お祭りの音楽をよりよくしていくという姿を見ることができなかった。以上の反省から、2年次は自分の作品や表現、考えなどを立ち止まって考える場を設定し、さらに音楽のよさを追求していけるような題材構成を考えていく。

②子供の思考・判断のよりどころとなる音楽を形づくっている要素の明確化

題材を通して、子供の思考・判断のよりどころとなる音楽を形づくっている要素を明確化していく。そうすることで、音楽的な見方・考え方を働かせて、よりよい表現を求めたり、曲全体を味わって聴いたりするという「粘り強さ」に働きかけやすくなると考える。また、表現領域と鑑賞領域を関連させて指導しやすくなり、子供たちもよりどころとすべき要素を生かして表現や鑑賞の学習を深めることがしやすくなると考える。更に、要素を明確化することで、思考・判断のよりどころとなる要素がどの子供も同じになる。よりどころとする要素が同じであれば、友達の意見や考えを参考に再考しやすくなるので、解決への糸口がつかみやすくなるであろう。

1年次では、2学年の音楽づくりの実践で、「リズム」と「反復」を思考・判断のよりどころとした。要素を2つに明確化したことで、どの子供も自分なりのお祭りの音楽をつくることができた。2年次も引き続き、要素を明確化することで、学習を深められるようにしていきたい。

③比較聴取の工夫

比較聴取を通して、要素の働きをつかみ、そこで知覚・感受したことを自分の表現や鑑賞に生かしていけるようにしていく。感じ方の違う2つの楽曲を比較聴取することで、それぞれの要素の働きを知覚することができる。1つの楽曲を聴くだけでは、その音楽がどんな感じがしてどういう特徴をもっているのか気付きにくい。しかし聴き比べることで、学習対象となる楽曲の知覚・感受の関連をより実感しやすくなると考える。そうすることによって、「こんな感じの音楽にするには、こう表現すればいいのか。」「音楽を聴いてこんな感じがするのは、この音楽にはこういう特徴があるからなのか。」という気付きをより促しやすくなる。それがよりよい表現や曲全体を味わって聴くための糸口となり、学習に対して粘り強く取り組む態度をさらに促進させていくものと考えられる。

1年次の2学年の実践では、友達のつくった「お祭りの音楽」を比較聴取することで、「くり返しが違うと面白い。」など、反復の違いが生み出す音楽のよさに気付くことができた。課題としては、要素の気付きをもとに、自分の音楽と向き合う時間をつくらなかった点である。2年次では気付きをもとに、もう一度試行錯誤する場を設定していく。

④協働して、学び合う場の工夫

協働して、学び合う場を工夫することで、音楽の楽しさを味わえるようにしていく。一人で音楽活動するだけでなく、友達と音を合わせたり、重ねたりするなど友達と一緒に音楽活動することで楽しさを感じさせたい。また、友達の表現を聴き合ったり、音楽から感じ取ったことや自分の聴き方などを伝え合ったりする場を設定していく。そうすることで、多様な表現や聴き方などを知ることができ、自分の表現や聴き方を深めたりすることにつながっていくと考える。さらに、音楽のよさを追求していくために、他者の考えを自分の表現や聴き方に生かしていけるようにしていく。他者との協働を通して、自分では思いつかないような新たな気付きを得られる場合がある。それが音楽のよさを追求していく糸口となるであろう。

1年次の2学年「おまつりの音楽」の実践では、常時活動として、リズム遊びを行った。友達と交互にリズムを打つ活動を取り入れたことで、「友達と一緒にお祭りの音楽をつくってみたい。」という意欲をもたせることができた。また、ペアの友達と協働してお祭りの音楽をつくったことで、友達の考えを聞いて「それいいかも」と反応したり、試行錯誤して行き詰っている児童が、

それに納得したりするという様子が見られた。2年次では、様々な表現や感じ方、聴き方があることに気付かせ、多様性を認め合い、さらに音楽のよさを追求していけるようにしていく。

〈引用文献・参考文献〉

- 山下薫子編著(2017)『小学校 新学習指導要領 ポイント総整理 音楽』東洋館出版
宮下俊也編著(2017)『平成 29 年度改訂 小学校教育課程実践講座 音楽』ぎょうせい
文部科学省『平成 29 年度告示 小学校学習指導要領 音楽編』
山梨大学教育学部附属小学校 令和 3 年度研究紀要
教育芸術社(2020)『小学生のおんがく』